



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第92号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第92号. 京大上海センターニュースレター 2006, 92

ISSUE DATE:

2006-01-18

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/26409>

RIGHT:

京大上海センターニュースレター

第92号 2006年1月18日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

- 上海センター「中国東北振興講演会」のご案内
- 上海センター「比較経済改革セミナー」のご案内
- 中国旅行を通しての所見・所聞・所感(下)

+++++

上海センターセミナー「中国東北部振興における日本の役割」 のご案内

以下のようなセミナーを企画しました。講演者はお二人とも日本語がお上手ですので、日本語でのご報告をお願いしております。

日時 2006年2月28日(火)2:00-

講演者

楊棟梁 南開大学日本研究院院長
「中国東北部振興における日本の役割」
玄東日 中国延辺大学人文社会科学学院副院長
「図們江-羅津ルート開発の新しい可能性について」

会場 経済学研究科3F 第311教室

+++++

上海センター・セミナー「共産党政権下の経済改革を比較する」 のご案内

開催日時 2006年3月4日(土)13:00-17:30

会場 経済学研究科第311教室

開会挨拶 山本裕美(京都大学経済学研究科上海センター長)

会議の趣旨説明 大西 広(京都大学経済学研究科教授)

報告と討論

第Ⅰ部 ラオスとベトナム(通訳あり)

「ラオスにおける経済改革の特徴について」(13:20-14:20)

スサバンディット・インシシェンメイ(ラオス計画投資委員会国家経済調査研究所)

「ベトナムの経済改革と比べたラオス改革の特徴について」(14:20-14:40)

ヌゲン・ノグトアン(ベトナム国立政治アカデミー専任講師)

討論(14:40-15:15)

休憩

第Ⅱ部 キューバと中国

「キューバにおける経済改革の特徴について」(15:30-16:30)

新藤通弘(アジア・アフリカ研究所・研究員)

「中国の経済改革と比べたキューバ改革の特徴について」(16:30-16:50)

大西 広(京都大学経済学研究科教授)

討論(16:50-17:25)

+++++

中国旅行を通しての所見・所聞・所感(下)

上海センター協力会会員 太田宏明

(2). 日本以外の諸国に対する見方

以上(1)では、日中間の緊張に多少とも関連のある見方について触れたが、欧米に対する見方乃至は感情に関する発言を以下に紹介する。

(2)－①. 英仏に関する見方

中国に対する侵略はアヘン戦争以来欧米列強が開始し、中国は彼らによって被害を被ったのであるが、現在は日本が嫌悪の対象となっている。現在の中国人の欧米列強に対する感情につき筆者の問いに対して、アヘン戦争勃発地に近い中山でP氏は次のように語った。

〈例2 1〉「中国はアヘン戦争以来英国、フランスから多大な被害を受けた。しかし、現在は両国との関係は非常に良く、過去の侵略の歴史は問題になっていない。」

(2)－②. 米国に関する見方

米国に関してA氏夫妻は次のように語った。

〈例2 2〉「米国一国での世界支配は問題である。」

3. 今後の日中関係に対する見方、考え方

以上過去ならびに現在に対する見方、考え方に触れたが、以下今後の日中関係についての考え方が表れている発言を紹介する。

(1). 日中関係の友好の継続ないしは発展の願望

下記のように日中間の友好の継続ないしは発展を願う発言が多く見られた。

〈例2 3〉A氏「中国は戦争をしたくはない。世界が平和になることだけを望んでいるのだ。」

〈例2 4〉H氏、I氏「中国人は平和を望んでおり、戦争はしたくないのだ。」

〈例2 5〉L氏「日中交流の歴史は長く、その中で両国が戦争したのはわずか50年くらいの短い期間である。それ以外は友好的な関係であった。」

現在は田中角栄と周恩来が国交を回復したことにより、友好的な関係にある。過去に戦争があったが、将来お互いに協力し合って発展していけばよい。」

〈例2 6〉O氏「本来日本、中国、韓国が仲良くし、協力して前進すべきである。もしこの3国が協力し合えば、この地域が世界で最も強力な地域となるであろう。」

〈例2 7〉P氏「日中戦争は過去の歴史であり、戦争があったからといって中国人は日本人を憎んではない。・・・大事なのは、人民は戦争を望んではないのだから、友好的な関係を永続させることである。」

(2). 日中関係好転のための前提

現在の日中間の緊張した関係の好転のための前提と、今後の方向に関し下記の表現があった。

〈例28〉H氏、I氏「日中関係を好転させるためには、現在の日本の指導者が過去の誤りに対し、明確に詫びを表明すべきである。

あとは、お互い平等の立場で協力して、未来を切り開いていけばよいのだ。なお、この平等の思想はアヘン戦争以来、列強各国から不平等を強いられた苦い経験を通して身をもって得た教訓である。」(前掲(1)．日中戦争～日本人に対する受け止め方①．理性的な受け止め方〈例1〉)

(3)．対抗的姿勢

言葉の底に対抗的感情が潜んでいるのではないかと思われる表現があった。

〈例29〉G氏「中国は、過去に弱かった所以他国に侵略された。しかし、現在は強くなり、核兵器も持っている所以他国から侮られなくなった。」

(4)．その他・・・情報化社会

2004年9月広州のタクシー運転手O氏は次のように、日本の状況をインターネットで見ていると語っていた。このことは、情報化時代の現在、日本国内の状況は直ちに中国の民衆に伝わり、対日感情の形成に影響することを物語っている。

〈例30〉O氏「日本の状況はインターネットを常に見ているのよく知っている。現在は、インターネットで何でも知ることが出来る。」

IV．感想

以上筆者が中国旅行中にめぐり会った中国人の、日本乃至は日本人に関する見方、考え方、感じ方なりを紹介したが、これらを通して受けたひとつの感想をまとめてみたい。

始めに簡単におさらいしてみたい。

先ず、過去の日中間の戦争および支配に対する見方については、Ⅲ．1．(1)．①．「理性的な受け止め方」で見たように、日中戦争時の日本の指導者と一般国民とを区分し、日中戦争は日本の指導者の間違いにより起こされたものであり、日本の一般国民は中国人と同様被害者である、という受け止め方がある。同時に、日中戦争の被害の体験に基づき②．「感情的な受け止め方」で見たように感情的な受け止め方がある。仮に7件ある「理性的な受け止め方」が建前として言われたものとしても、「感情的な受け止め方」の4件を上回り、個人の考え方乃至は国の考え方が表れているのではないかと思われる。

次に最近の日中関係に対する見方についてはⅢ．2(1)で見たように、①．最近の政治指導者の言動、政策、②．日本人の歴史認識、③．その他時事、に関する日中間の認識の相違に対する焦燥感が読み取れると思われる。また、中国の愛国主義教育に関する見方にも日中間でギャップが存在する。これらに共通して言えるのは、日本人の過去の歴史に対する認識の欠如乃至は認識のズレに対する中国人の苛立ちであると考えられる。

以上から次のような方向が想像されると思う。従来は日中間の戦争に関し潜在的な「感情的な受け止め方」は有りながらも、「理性的な受け止め方」により感情の噴出を抑制し、日中関係は比較的安定することができた。しかし、最近変化が起こりつつある。もしも日本の首相が過去の戦争指導者を祀る靖国神社への参拝を続けるなら、戦争指導者と一般国民を区分して「理性的な受け止め方」をする中国人の論理的根拠を喪失させ、彼らをも「感情的な受け止め方」に転化せざるを得なくするであろう。また今後の日中関係に対して冷静に考えている民衆も同様となろう。結果として、日本の過去ならびに現在の指導者および日本人全般が、憎悪の対象

となるのではなかろうか。

さらに靖国問題を尖端として、教科書問題等の日中間の敏感な事項に関する日本国内の動向は、Ⅲ 3 (4) 〈例 3 0〉で見られるように、インターネットを通じ瞬く間に中国民衆に広がるであろう。日本の適切な対応が無いなら、中国民衆の対日感情は一層悪化し、日中関係は緊張をさらに増幅することになるであろう。

他方、日本は将来的には経済をはじめとして相対的地位は低下するであろう。戦後の日本は経済至上主義で歩み経済大国化し、いまだに経済大国であることに自己の存在の中心的拠り所を置いていると思う。しかし、去る11月5日開催の“上海センター・中国自動車シンポジウム”で、日本の先端産業である電気産業は既に中国にキャッチアップされ、自動車産業も近年中に同様の事態に立ち至る事が予想された。今後は日本経済全体としても、絶対量としては拡大するとしても世界的競争の中であって、世界的にもアジア、中国においても相対的地位は低下するであろう。その時、経済大国主義の価値観はその基礎が崩れ、日本人はその精神的拠り所を失うことになるのではなかろうか。

また、世界とりわけ中国、韓国から見た日本の存在意義も薄れるであろう。その時になればあるいは、靖国問題、歴史問題などは問題にさえならなくなるかも知れない。それは、問題が解決したからではなく、日本とまともに対話することが両国から諦められる事であり、日本の存在が無視するに足るほどに低下することを示すこととなるであろう。この時、日本は両国だけでなくその他の諸外国からも尊敬、畏敬の念ではなく、軽蔑の念をもって見られる存在になるのではなかろうか。そして、日本人は深刻な挫折感、敗北感を味わうことになるのではないか。

このような、日中間の緊張状態を改善し未来に進むには、日本としてどのように考えたらよいのであろうか。

日本人が原点に立ち返って考えるよう目を覚ますことが先ず必要であろう。そして、中国人の、日中間の過去、現在、将来に関する見方、感じ方ならびにその根底にある歴史的事実を、日本人が主体的に深く想い認識し、この認識の上に過去のけじめを適切に処理することが必要と考える。以上が過去の清算だと思う。

次は、未来志向である。基本的には日本の拠って立つ価値観を構築することであると思う。現在の世界的競争の時代に、経済面が大事なことは言うまでもなく、経済的競争力を付けるために日本は切磋琢磨する必要があるのは当然のことであろう。

しかし、さらに大事なことは、日本として経済大国主義とは異なる、拠って立つことが出来る内面的価値基盤を構築することである。人間の根源に根ざした、歴史的試練にも耐え得た人類共通の思想、文化、(これらには日本が生み出したものも含む)を汲み取り、この上に現在ならびに将来に向かった価値観を構築することが基となると思う。

その基盤の上に、また同時に、中国、韓国その他諸国と平等の立場で、互いの歴史、文化を尊重し、共存共栄を図ることが必要である。これにより、現在の緊張関係を真に乗り越え、友好関係を築くことができると考える。

こうして日本が他国からも尊敬される存在となると同時に、自らも尊厳、自信を持って立ち行くことが出来ると思う。

これが、未来志向ではなかろうか。